

MOVE YOUR HEART!

進路通信第12号

2月です。もうすぐ節分、立春です。豆まきはもともと、旧暦の大晦日に「追儺（ついな）」の儀式で鬼を追い払い、翌日の新年（新春）＝元日を迎えるという行事でした。つまり現在の2月はほぼ旧暦の1月で、春の初めだったのです。年賀状に「新春」と書くのもその名残です。春といっても「水温む」とはいきませんが、寒くはあっても日は少しずつ長くなり、学年の終わりが近い感じがしますね。鼻はむずむずしませんか。学年末考査もあります。

3年生のみなさんは自宅学習期間に入ります。一般入試の人はよいよ本番。第1志望をかなえてください。登校して自習室で勉強するのはもちろん、いつでも質問や相談に来ていいですよ。我々は3月の終わりまでみなさんを全力でサポートします。進路が内定している人は自主・自律で生活してください。間違っても自分の進路を台無しにすることがないように頼みますよ。

2年生のみなさん、普通科は全統高2共テ模試が控えています。「3年生0学期」という言い方は好きではありません（個人的に）が、確かにその通りです。3年生になるんだ、という自覚を持ちましょう。部活動でも学校行事でも名実ともに主役になるのです。

1年生のみなさん、学年末考査です。中学までと違い、高校では「単位認定」されないと進級・卒業できません。本校は単位制ではありますが、「なんとかしてもらえるのでは」という甘い考えで1年を終えることがないようにしてください。脅すわけではありませんが、楽をすればその代償を自分で払うことになります。

卒業式と入検（高校入試）も間近です。「2月は逃げる」といいます。実際早いと思います。新しい世界に向けて力を貯えていますか。

《当面の進路に関する行事（一部既報）》

- 2 / 1（木）～6（火） 3年生学年末考査
- 2（金）3（土） 2年生全統共テ模試
- 5（月）～9（金） 2年生インターンシップ
- 7（水） 3年生学年集会
- 12（月） 武義高校創立記念日
- 15（木）～21（水） 1年生ビ情科検定対策週間
- 22（木）～28（水） 1、2年生学年末考査
- 25（日） 日商簿記検定
- 29（木） 考査返却 同窓会入会式 卒業式予行 3年生送る会
- 3 / 1（金） 卒業式

《震災のたびに》

何もできない。いや、何もしないことが最大の貢献になる。

自衛隊、消防、警察、役場、学校など行政に携わる人々は文字通り全力で、自分のことはかえりみず行動している。行政の一員としてわすかだが災害時に役目を担った経験から強くそう思う。もどかしい気持ちはわかるが、してほしいと思った活動ができないときは必ず必ず、やむを得ない理由がある。ヘリが飛ばせないのも、道路の復旧が遅れるのも、災害直後はボランティアや物品を断

るのも絶対絶対、理由があるのだ。必要なのは名のある人のパフォーマンスや対処に対する批判ではなく、多くの名のない人々の活動なのだ。我々は求められるまではそういう活動を妨げないのが最良の「行動」だと思う。能登がどんな土地か知っているのか？寸断された道路にクルマを乗り入れて渋滞を加速させることはよいことか？水も電気も食料もトイレも部屋もない土地へ行って普通の人に何ができる？批判して混乱させることで人を救えるのか？

税金という出費をし、理解と協力という応援をして、要請があるまでは待つ。少なくとも別の土地で新たな問題を起こさないのが大事だ。現地に派遣された人々にも家族はいるだろう。急で長期間の「出張」は残った家族にとってもたいへんだと思う。その人たちの応援ならできるかもしれない。それも立派な貢献だと思う。まず自分の生活を自分で守ることからだ。

寄付する人を偽善とは思わない。寄付しない人を責める気も全くない。黙って40億円の寄付をしたあとでマスコミに突っ込まれて「はい、売名行為ですよ」と言っただけの人は立派だと思う。自分で責任がとれる行動がなにかを考えて、自分だけで実行したことだと思うからだ。

一番知りたいのは事後の検証結果で、諸機関は当然念入りにやっている。だがそれをマスコミが大きく取り上げたことはあまり記憶にない。「喉元過ぎれば」だとすれば残念だ。

《能登》

能登には大学3年の夏、方言調査で出向いた。

東京から来ていた国立国語研究所の飯豊毅一教授からは「能登半島には日本語における特徴的な表現、アクセント、発音が広範囲にわたって残っている。また『時国家』の存在によって特異な敬語表現もあるはず。」と聞いていた。教授とともに研究室のメンバーでチームを組み、宿泊しながら能登半島の人々に調査した。それぞれの地区の区長さん級のご老人に事前に役場から依頼してもらい、約束の日時に学生が自宅に伺う。カーナビどころか携帯もなかったが、道ばたの人に尋ねれば自宅の場所はすぐわかった。どの方も玄関の前で待っていてくださり、場違いな雰囲気のある学生にも心のこもったもてなしをしてくださった。アンケートの項目は100以上あり、2時間近い聞き取りになるが、ご老人方は全く苦にせずつきあってくださった。お茶とお菓子のあと、決まって缶コーヒーが出てきた。今思えば雪で閉ざされた時のために冬の期間貯えてあったものだったのだろう。調査のあとの世間話は心温まるものばかりだった。お礼は大学の判を押しただけのタオルだが、それを差し出すと大切なもののように受け取ってくださった。比較のために地元の中学校でも調査を行ったが、自分のことを「オレ」と呼びながら楽しそうに協力してくれた女子中学生たちの笑顔が忘れられない。「能登はやさしや土までも」を実感した日々だった。

実際に能登では日本語の古語の発音が生きていることがわかり、関東とも関西とも異なるアクセントが確認され、さらには4重尊敬らしい言い回しも発見できた。調査した冊子は捨てずに今も手元にある。「調査地点・輪島市町野地区・農業」などと記入されている。なつかしさがこみ上げてくるが、それだけに震災の現場を見るのが怖い。

学生時代、寮で4年間寝食を共にした珠洲市出身の同級生は30年ほど前、東京での結婚式に私を呼んでくれた。彼が入学してすぐ熱を出したとき、部屋が近かったので私はおかゆを作って持っていったことがある。そのことを恩に感じて呼んでくれたとすればうれしい。彼は「ありがとう」と言いながらほとんど食べられず、実際は私が自分で食べたのだが。学生時代彼はバイトに明け暮れていた。火災報知器の点検のバイトをしていた時は金沢市内のホテルのことをよく知っていて仲間に重宝されていた。結婚式以来一度も会っていないが彼は学生時代「盆は帰るよ」と言っていたことを思い出す。この正月に彼の家族が里帰りしていなかったことを願うのみである。